

【活用にあって】

文学史に関して教科書では、郷土ゆかりの作家・作品や古典・近代文学の名作などが紹介されています。日本文学の流れも上代から現代までの時代ごとにまとめて示されたり、近代文学史年表としてまとめられたりしています。また、本との出合いをねらいとした「読書への招待」「読書案内」の中で様々な本が紹介されています。

新聞でも本は紹介されていますが、子どもたちは「難しくて分からない」と言います。ですが、この記事のように川端康成と岐阜とのつながりに触れたものであれば、岐阜に住む人は興味をもてるかもしれません。小説の舞台が身近なところだったとなれば、地域への関心も高まります。次ページに岐阜とのつながりに関する記事を紹介します。

解答例

問1：ア・カ

問2：ウ

1921年10月、川端雪が初代申との結婚を約束した翌日、岐阜市で撮影された1枚。右は川端の友人の三明、西方寺提供



川端とのつながり感じて

県内にゆかり期待の声

岐阜の寺で暮らす少女への恋心から、川端康成は青年の頃、岐阜の地に三度通

い、後に小説「篝火」の舞台となった。草稿が見つかったことを受け、市内のゆかりの地にスポットライトが当たること期待の声が上がった。

長年、川端と岐阜との関連を研究する中部学院大の三木秀生講師(モウ)によると、川端は東京での学生時代に、下宿近くのカフェで働いていた伊藤初代という少女と出会う。店が閉店したため、初代は店のマダム

の出身地で、その姉が住む現岐阜市の西方寺に養女として引き取られた。

ホテルパークの前身の港館では、川端が初代らと3人で食事をしたとされる。現在は川端にちなんだ展示コーナーがある。岐阜市湊町で

岐阜を訪れ、初代と二人で長良川河畔の旅館「港館」で食事をした。川端は当時二十二歳、初代は十五歳だった。

その後も初代に会いに岐阜を訪ね、港館の対岸にある旅館で結婚を約束。その体験が「篝火」に描かれている。だが、後に初代からの手紙で結婚は破談。淡い恋と別れの記憶は、川端の小説にたびたび登場する。

三木さんは、草稿の発見に「推敲を重ねた川端の思考の過程が分かるのではないかと。文学のまちとして岐阜にスポットが当たれば」と話す。

三人で食事をしたとされる旅館は、現在のホテルパーク。小説にも「南岸の宿」として登場する。館内には、川端や初代の写真などゆかりの資料を展示するコーナーを設けている。

女将の山岡典子さん(五八)は、草稿発見のニュースに「直筆の原稿なら、本人の思いが伝わってきそう」と歓迎。「岐阜と川端さんのつながりは、まだまだあまり知られていないので、小説の舞台として長良川周辺を訪れる人が増えれば」と期待

した。

小説では「澄願寺」の名で登場する西方寺。前任職の田中大禅さん(六八)によると、四代前の住職の時代に、初代が一時暮らしたとされる。「川端には、愛する純粹な気持ちがあったのだろう。素朴なロマンスが岐阜の地であったことが、もっと広まってほしい」と願った。

(安福晋一郎)

【2022年3月17日付岐阜県版】